

われ終に萬鉄五郎に及ばぬを  
しりて絵かきを思ひとまりき

小田島孤舟 第13歌集『追憶の人々』(1948年)より

# 歌人 小田島孤舟展

《萬鉄五郎と追憶の人々》

2022年

2023年

《会期》 12月10日 [土] — 2月26日 [日]

《開館時間》 午前8時30分～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

《休館日》 月曜日 (月曜が祝日の場合はその翌日)、年末年始 (12月29日～1月3日)

《入館料》 一般400 (350) 円 / 高校・学生250 (200) 円 / 小学・中学生150 (100) 円

\* ( ) 内は20名以上の団体料金

《主催/会場》 萬鉄五郎記念美術館 岩手県花巻市東和町上沢5区135番地 〒028-0114 TEL.0198-42-4402 FAX.42-4405





《師範学校の同級生たち》  
孤舟（後ろ）、堀内紫玉（左）、菅原由吉（右）、川村兼五郎（前）

孤舟が師範に進学した明治30年代は、盛岡中学に石川啄木の「白羊会」、細越夜雨らの「開潮会」、師範学校には高野桃村らの「幽蕪会」が起こり、学生らが県内の文学活動の中心をなしていました。その中にあって、孤舟も短歌や詩の制作に没

手歌壇の父」と称されています。孤舟（本名：理平造）は1884（明治17）年、東和町小山田（現花巻市）の農家・佐々木金太郎の次男として生まれます。土沢尋常高等小学校で、共に学んだのが萬鉄五郎でした。校長の新田浅之助から絵を教わり、二人は画家を志しますが、「われ終に萬鉄五郎に及ばぬを知りて絵かきを思ひとまりき」と詠んでいるように、萬に敵わないと悟った孤舟は、新田のすすめで岩手県師範学校に進学。そこで文学に傾倒していきます。



萬と孤舟が出会った土沢尋常高等小学校。孤舟は小山田に高等科ができるまでの3か月ほどここで学ぶ。跡地には現在、萬鉄五郎記念美術館が建っている。



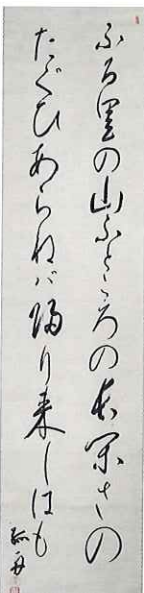
恩師・新田浅之助は、孤舟と同じ小山田村の出身で、絵や文学に通じていた。



萬鉄五郎《孤舟の肖像》1914（大正3）年 油彩・画布 33.0×23.5cm 萬鉄五郎記念美術館

画家・萬鉄五郎と小学生時代に同級であった小田島孤舟は、岩手県師範学校時代に石川啄木らと交友を持ち、明治から昭和にかけて活躍した歌人です。彼は72年の生涯を捧げ、短歌3800余首、歌集15編を著し、岩手歌壇の育成に貢献し「岩手歌壇の父」と称されています。

頭。在学中の1905（明治38）年には啄木の「小天地社」を訪ね、交友を深めていきます。東京新詩社の『明星』に歌を発表し始めたのもこの頃でした。師範学校卒業後の1909（明治42）年、教師として赴任した奥北の浄法寺村は、「稲庭吟社」の句会が開かれるなど、文芸の盛んな土地で



書《ふる里の山ふらうの水京の》  
たふしあらねば帰来しはも  
萬鉄五郎記念美術館



《杉風洞の書齋にて》  
孤舟は西行、芭蕉などの俳人・歌人の像を好んで収集していたほか、萬の作品も油彩や水墨などいくつか所蔵し、それらを部屋に飾っていたという。



《若山牧水歓迎会》1926（大正15）年  
歌誌『創作』の主幹・若山牧水が、揮毫旅行で盛岡を訪れた際の祝宴の様子。孤舟は啄木、牧水などの文人らと幅広い交友を持ち、短歌の研究に労を借しなかった。

第一歌集『郊外の丘』を発表。この歌集は宮沢賢治も購読し



『曠野』第5巻第1号  
1923（大正12）年（表紙画：萬鉄五郎）  
『曠野』は1909（明治42）年創刊し、第25号まで発行。のち盛岡移住後、第二期『曠野』が8号まで発行された。

を發行します。当初は彼と意気投合し、文芸誌『曠野』の相澤暁村が村医として赴任すると、孤舟は彼と意気投合し、文芸誌『曠野』を發行します。当初



高野桃村（左）と石川啄木（右）  
1908（明治39）年



『明星』申歳第10号【複製版】  
岩手県立図書館

した。そこに、俳人の相澤暁村が村医として赴任すると、孤舟は彼と意気投合し、文芸誌『曠野』を發行します。当初



書《知足者富》萬鉄五郎記念美術館

本展では、歌人・小田島孤舟の生涯を、作品や資料を交えながら辿り、萬鉄五郎ら文化人との関わりにも焦点をあて、彼の足跡を紹介いたします。

萬鉄五郎とも生涯親交が続ぎ、孤舟の歌集や『曠野』の表紙絵、挿絵などを萬が手がけています。孤舟もまた、萬が画会を興した際には労を惜しまず支え続け、幼馴染だった二人は、別の道を歩みながらも生涯互いに認め合う仲でした。

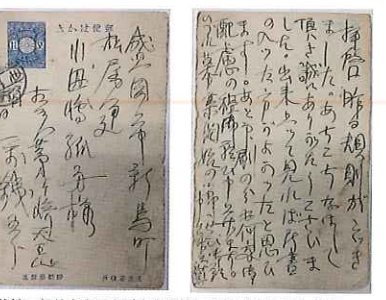
た記録があり、彼の歌作に影響を与えたとされています。1921（大正10）年、盛岡に居を移した孤舟は、盛岡高等女学校、盛岡女子商業学校、岩手女子高等学校などで教鞭をとり、多くの学生を指導しました。また、『白梅』『岩手教育』などの雑誌編集にも携わり、「編集の鬼才」と呼ばれました。晩年は岩手歌壇の育成に励み、多くの歌誌や歌会を指導。書家としても活動した彼の自宅は「杉風洞」と呼ばれ、短歌や書に親しむ仲間が集う、聖地となっていました。



盛岡 高松の池畔神庭山の孤舟歌碑は、生誕50周年を祝い1933（昭和8）年に建立された。代表作「われひとりよのつねびとのみちこえてしづかにゆかむさびしかれども」が刻まれている。



小田島孤舟 1944（昭和19）年頃



《萬鉄五郎差出小田島孤舟宛書簡》1922（大正11）年頃  
文面には「昨日規則がとどきました。あちこちなほして頂き誠にありがとうございました」とある。他の書簡からも、萬が画会「鉄人会」の規則書の編集・印刷等を孤舟に依頼していたことがわかり、二人の関係の深さが窺える。



萬鉄五郎 1925（大正14）年頃